

第1章 特訓

無名の墨谷二中の野球部にある日、野球の名門・青葉学院から二年生の転校生がやってきた。名前は谷口タカオ。といっても彼は青葉では二軍の補欠、レギュラーなど夢のまた夢という選手だった。ところが青葉のユニフォームを着た彼は青葉のレギュラー選手が転校してきたとかなちがいされてしまう……

1・1 放課後

谷口「あのう、すみません、や、野球部の練習場はどこでしょうか？」
生徒「この校舎のうらがわだよ、そのろつかをまっすくいて右がわ。」

谷口「ありがとう。」

谷口「あ、あの、ちよつと」

丸井「なんですか？」

谷口「キャプテンに会いたいですけど。」

丸井「キャプテン？ キャプテンは選抜ででかけてますが……」

谷口「じゃあ副キャプテンは？」

丸井「ほら！ あそこでノックをしている人がそうス。」

グラウンドにいた一年生らしい野球部員に声をかけ、入部したいことを伝えてほしいことをつげた。

丸井「あのー先輩……」

中村「ちよつとまってる！」

谷口「はい。」

副キャプテン中村がノックをしているあいだ、谷口は入部届けをにぎりしめ、ベンチに腰をかけてシートノック練習を見ていた。谷口は「この学校だったらなんとかやっていけそうだ。一生懸命やればレギュラーだってなれるかもしれない。」そんなことを考えながら練習をみていた。

中村「あ、またせたな！」

谷口「あ、あのう……入部したいんですが……」

中村「入部？ また時期はずれだな」

谷口「きょう転校してきましたです。」

といて入部届けを副キャプテンに手わたした。

中村「わかった！ キャプテンがかえったらわたしとけ。」

丸井「はい！」

谷口「あのー、タマひろいしてもいいですか……」

中村「すきにしろ。」

丸井「どつぞ、どつぞ。」

谷口「では……はい。」

谷口はバックネットのそばで制服からユニフォームにきがえた。ユニフォームのマークは前の学校の青葉学院のままであった。それに気がついた一、二年生の部員が谷口のまわりに集まってきた。

一年生A「もつと、ほかで着がえてもらえませんか。」

谷口「ご、ごめん。」

一年生A「バツカじゃなかるうか、キザなユニフォーム着ちゃってさ。」

中村「きみ、青葉学院の野球部にいたのかい？」

谷口「え…？ ええ、でも、どうして…？」

中村「やつぱり…、そのユニフォームみりゃあだれだつてわかるさ。ここたて

つづけ全日本で優勝しているじゃないの。」

谷口「あ、そうか、青葉は野球では有名だもんね！」

中村「そんならそうと、なぜはじめにいつてくれなかつたんだい。」

一年生A「お、おかげでぼくなんかとんだ失礼しちゃってさ……。」

谷口「いや、べつに…ぼくは……。」

一年生A「先輩！ 青葉学院のバツティングをみせてもらいましょうよ。」

中村「よし、みんな守備につけいっ！」

部員「オウ！」

松下「おっい外野、バツクバツク！」

谷口は気がすまないながらも、一年生にあとおしされてバッターボックスにはいった。相手ピッチャーの投げるボールが速すぎてみおくるも、たまたまボール球とわかる。二球目にはかかるだのちかくにとんできたボールにたいしてバットを振ると……まぐれにもホームランとなつてしまった。

佐々木「なにを、さわいどるかっ！」

中村「キャプテン！」

一年生A「あろう……。」

佐々木「青葉から……。」

谷口「二年の谷口です。よろしくおねがいます！」

一年生B「キャプテンにもみせたかったですね、あんなとんでもない暴投をホームラ

ンにしちゃうんだから。」

一年生C「それもライナーで……。」

谷口「あ、あれはまぐれですよ。」

中村「まぐれだつてさ、けんそんなしちゃって……。」

二年生A「なつなつ。」

谷口「もう……。」

佐々木「よし入部を認めよう。」

谷口「ど、どごうも……。」

佐々木「さあ、みんな練習練習！ 日が暮れてしまつぞー！」

部員「はい。」

中村「キャプテン谷口くんのポジションですがどうします？」

谷口「ボジ…、とんでもない、タマひろいでけっこうです。ぼくなんか。」

二年生A「タマひろいだとさ。」

三年生B「やつぱり大物のいっごとはニクイね、ねえ青葉ではどこを守つてんだい？」

谷口「ちよつ、ちよつと、ねえ、ぼくは……。」

佐々木「まあ、うちではいちばん新米だ。きょうのところはタマひろいでいいだろ

つ。」

谷口「では……。」

谷口は外野にむかつて走つた。やつとでみんなの目から解放されたことでホツとし一年生にまじつてタマひろいをはじめた。

1・2 次の日

谷口が入部した翌日、学校ではとんでもない転校生が野球部にはいつてきたと評判になる。そんなことは知らない谷口は一年生にまじつてグラウンド整備をしているが……

一年生A「先輩」

谷口「ん…、どつかしたのか？」

一年生A「どつかしたのかじゃありませんよ、いまや先輩のつわさで学校中たいへんなんスから。」

女生徒A「こつちをむいたわ！」

女生徒B「かわいいじゃない。」

一年生A「先輩、手ぐらいふつてあげたら。」

谷口「バカをいうなまつたく！」

男生徒A「おい一年生！、例の大物つてあいつかい。」

丸井「はい！」

男生徒A「うわさではすげえ大物つてきいたが、グラウンドの整備をやらされているようじゃたいしたことはねえんだな。」

丸井「し、失敬なことをいわないでください！ この学校ではまだ新米だからつて自発的にやっつてらっしゃるのです…」

男生徒A「ほーっ、で、そんなにすごいのか？」

丸井「そりゃあもう！、あのバッティングだったらプロでも通用しますね、きつと！」

男生徒A「へーっプロ…、それで守備のほうはどうなんだ。」

男生徒B「そうよポジションはどこなんだい。」

丸井「ポジ…、ハテ…？ ちょっとまつてくださいいね、きいてきます。」

丸井「あんのー谷口さんのレギュラーポジションはどこだったんでスカ？」

谷口「いいかよくきけつ、いずれはなすつもりだったがな…サードだつ…、といつても補欠さ、それも二軍のな…」

丸井はポジションだけきくとまた三年生の男子生徒のもとにいそいでかけていった。

丸井「サードだそうです。」

男生徒B「へーっ青葉のサード、まだ二年生でなあー！」

丸井「どうです、これでよくわかったでしょう。」

男生徒A「こいつは地区予選がたのしみだぜ。」

丸井「ま、おおいに期待しててください、わが野球部に谷口さんあります！ 八八八。」

谷口の耳にも丸井と三年生との話がとどいた。その話を聞いているとなんだか気持ちが暗くなってきた。

1・3 谷口の家で

谷口「せっかく、こんどの学校ではのびのび野球を楽しめるとおもってたのに…どうすりゃいいんだ」

学校からかえりながら、誤解からとんでもないことになっていることに谷口もようやくきづいた。うつむきながら家のドアをあけ帰宅した。父親は仕事道具のかななをていれしているところだった。

父「よう、ばかにはええじゃねえか。」

谷口「……」

父「こんどの学校でなんかあったのかい？」

谷口「と、とうちゃん！」

父「なんだとー、転校したい？」

谷口は父親の顔を見ると気がゆるんだのか思わず涙ぐんだ。そして谷口は今までのことを父親に話した。

父「フー、なるほど、そういう事情があったのか。」

谷口「おれの立場わかるだろ。」

父「しかしオメガもずいぶんかいがぶられたものじゃねえか、うらやましいね
学校中のスターってわけか。」

谷口「とうちゃん！ おれ真剣なんだぞ！ どうすりゃいいんだよ……。」

父「そんなことがわかかんねえのが、ようするに青葉の選手として通用するぐれ
いに腕をみがきやいのよ。」

谷口「しあわせだよとうちゃんは、ま、野球をしらないからムリもないけど。」

父「やかましいやい！ てめえそれでも男か！ やりもしないうちからゴタク
をならべやがって！ こいとっちゃんがおしえてやる！」

家の近くの御岳神社^{みたか}にやってきた二人は野球の練習をはじめました。

父「さあ、とうちゃんが投げてやるから打ってみろ！、そらよ。」

谷口「……。」

父「このやるう、とうちゃんが真剣にやってりやなんだ。」

谷口「あんなひでえタマが打てるかよ！」

父「あ、そういうものなのかい。」

谷口「もうちよつと前でいいからこのへんに投げてよ。」

父「ぜいたくいいやがって。ほらよ。」

ストライクの意味さえもわからない父からボールを投げてもらって谷口は練習する。近所の
子供たちが二人のようすをみてクスクス笑っている。

谷口「なんでこんなことしなくちゃならないんだ……そうよ、こんどの学校でうっ
かりこのユニフォームを着たのがまちがいのもどだったんだ。この胸のマー
クをみればだれだって青葉学院ってわかるよな、ここ数年来ずっと全日本で
優勝しているんだもの。いまさら青葉で二軍の補欠をやってたなんていえや
しない……。」

父「やる気あんのかこのーっ。」

谷口「あ、やるやる。」

父「そらっ！」

父「そらっ！」

父「ぶーっ！」

父「いくら誤解にしてもよくもまあおめえなんかを青葉の選手とみたね、おら
あ補欠っていわれたって信じねえよ、ほんとに。いくぞ補欠！」

父から投げてもらって谷口が打つ打撃練習がはじまった。最初はしんにあたらなかったタマ
がだんだんとあたるようになってきた。最初はひやかしていた子供たちもその真剣さに次第に
だまってしまった。二人の練習は夜遅くまで、毎日つづいた。

1・4 守備練習

毎日の家での練習で谷口のユニフォームはボロボロである。そのユニフォームで今日もタマ
ひろいをしてるよ……

丸井「ほんとに、どうしちゃたんだろ、さいきんの谷口さん。」

一年生A「うん、ユニフォームはボロボロだし、からだじゅうキズだらけになっちゃっ
てね。」

一年生B「もしや、世をすねてどこかでケンカでもしたんじや。」

丸井「けんか?」

一年生B「考えてもみる、名門青葉のレギュラーがここじゃすーっとタマひろいなん

だぜ、やけにもなるぞ。」

一年生C「なるほど!」

一年生A「谷口くん、キャプテンがおよびだ。」

谷口「はいっ。」

中村「谷口、守備につけ!」

谷口「はっ、はいっ。」

一年生B「おい、守備だとさ。」

一年生C「うん!」

谷口「ついにくるときがきたか!」

佐々木「いくぞ!」

谷口「おねがいます。」

谷口のはじめての守備練習ということで部員全員が注目した……。しかし……キャプテンが打つボールがなかなかとれない。取れたとおもっても送球でミスる。部員のなかには「これで青葉のレギュラー選手なのか?」というたがう気持ちではじめる。

1・5 御岳神社で

その日からふたたびとうちゃんのかびしい特訓がはじまった。朝に……、晩に……、それこそ寝る間もおしんで……ノックができない父はお手製のマシンをつくって協力した。しかしどんなに努力してもなかなか強い打球がとれない。

谷口「だめだ、どうしてもとれない。ど、どうすりゃいいんだ。」

父「もっ、あきらめるタカ、おまえが二軍の補欠だったことをキャプテンに正

直に話すんだ。」

谷口「い、いまさら、そんな。」

父「やるだけやって、だめだったんだ、胸はって話してこい!」

谷口「ううっ。」

父「いいんだ、いいんだ、よくここまでがんばってきた、とうちゃんおめえを

みなおしたよ。」

谷口「ううっ。」

谷口は父の胸で泣きくずれた。

1・6 練習中

守備練習中、ノックをしているキャプテンのところに谷口がちかづいていく。

谷口「キャプテン……」

佐々木「なんだ。」

谷口「あの……お話したいことがあるんです……」

佐々木「……、あとにしろ。」

谷口「……」

佐々木「谷口、なぜ守備につかん! なにをくずすしとる、はやくせんか!」

谷口「はいっ。」

佐々木「いくぞ!」

守備練習がはじまった。前回とはちがってどんな形であろうと全力でボールをとろうとする谷口のすがたがあった。グローブがとどかなかつたらグローブのない手でボールをおさえ、強いタマでもこわがることなくからだだてとめて投げかえした。うまいとはいえないが、部員はどんなタマにもくらいついていく谷口におどろくのだった。またキャプテンの打つタマは誰から見ても他の部員に打つときよりも速く強いタマだった。

結局キャプテンには青葉でのことは話ができずにおわった。

1・7 新キャプテン誕生

月日がながれて三月も末になった。三年生がとうとう卒業する日がやってきた。今日は卒業していく三年生から新チームのオーダーとキャプテンが発表になる日である。一、二年生の部員全員がキャプテンのことばに注目する。

佐々木「地区予選をまぢかにひかえ、新オーダーならびにキャプテンを発表する。」
部員A「いよいよ発表か……」
部員「おーっ！」

一番 ライト 島田
二番 ショート 高木
三番 ピッチャー 松下
四番 サード 谷口
五番 キャッチャー 小山
……

キャプテンはオーダー順に発表した。名前が書かれるたびに部員からはどよめきの声がある。谷口の名前は四番目に書かれた。

谷口「あっ、よ、四番でサード。」
一年生A「さあすがあー！」
丸井「なっなっ。」
谷口「じょ、じょうだんじゃない、いくらなんだって……お、おれには重荷すぎる……」。

谷口は四番でサードという重要なポジションをあたえられたことにぶくざつな思いであった……。そしてキャプテンは最後に新しいキャプテンの名前を発表した。

キャプテン 谷口タカオ

部員「おーっ……」
一年生A「やつぱり……」
丸井「ん！ 谷口さん！ ほらー！」
谷口「キャプ……、キャプテンだって、ち、ちよつとまってください、ほ、ぼくはこのチームにはいつてまだまもないっていうのに、じょうだんじゃないです。」
部員「いいじゃないスか、そんなこと！ 各門の青葉でレギュラーやってたことだし……」
丸井「谷口さんをおいて、ほかにキャプテンなど考えられませんよ。」
部員「そつだ、そつだ。」
佐々木「谷口、みんなをたのんだぞー！」
部員「これからもよろしくお願いします、どつかおてやわらかに。」

谷口は部員にかこまれながらもさっさといくキャプテンをおいかける。

谷口「キャプテン！」
 佐々木「どつした？」
 谷口「ぼ、ぼくにはキャプテンをやる資格などありません。」
 佐々木「どついうことだ？」
 谷口「ぼくは青葉の野球部では補欠だったんです。そ、それも二軍の……」
 佐々木「そんなことくらいおまえが入部したときのプレイをみてひと目でわかった。」
 谷口「えっ……」
 佐々木「いまや、おまえには実力があるじゃないか。」
 谷口「実力……？ まってください、ぼくは誤解から青葉のレギュラーとして期待されました。いまはただその期待をうらぎらないよう努力することで精いっぱいなんです。そ、それをキャプテンだなんて重大な……」
 佐々木「おまえはその期待にりっぱにこたえたじゃないか、かげの努力でな！」
 谷口「え……」
 佐々木「そしていまやおまえは青葉のレギュラーにもまけないほどの実力をつけた。」
 谷口「青葉のレギュラーにも……」
 佐々木「どつだ、こんどはキャプテンとしてみんなの期待にこたえてくれんか。」
 谷口「……」
 部員「ぼくたちからもおねがいます！」
 部員「ひきうけてください、谷口さん！」
 部員「おねがいます！」
 佐々木「さあ！」
 谷口「よ、よろしく。」

キャプテンから肩をたたかれ、部員の声にもはげまされてやっと谷口の顔にも笑顔がこぼれた。新キャプテンの誕生である。

